

雀をとる法

やまとの翁

いや、もー、年を取ると、いろんなこと、を、
聞くもので、この間も、翁が、さる所で、おかし
な話を、聞きました。それわ 雀を取る法なので
考は 頗 甘い様ですが、實際は、其通り、行
くもんですか、やーですか。まづ一通り お咄だ
けして 見ましょー。

その人の 謂ふのは こーなんです。まづ 鐵
の十能のなかへ 米粒を すこしばかし 入れて
それを 倉の二階の窓から 外へ向いて さし出
して 置くのです。すると 雀は 毎日 朝から
倉の屋根の上に 居ますから それを 見て こ
れは結構な と馳走だ と いふので いきなり
とんで来て 食べて 仕舞ふ。さて 翌日に な

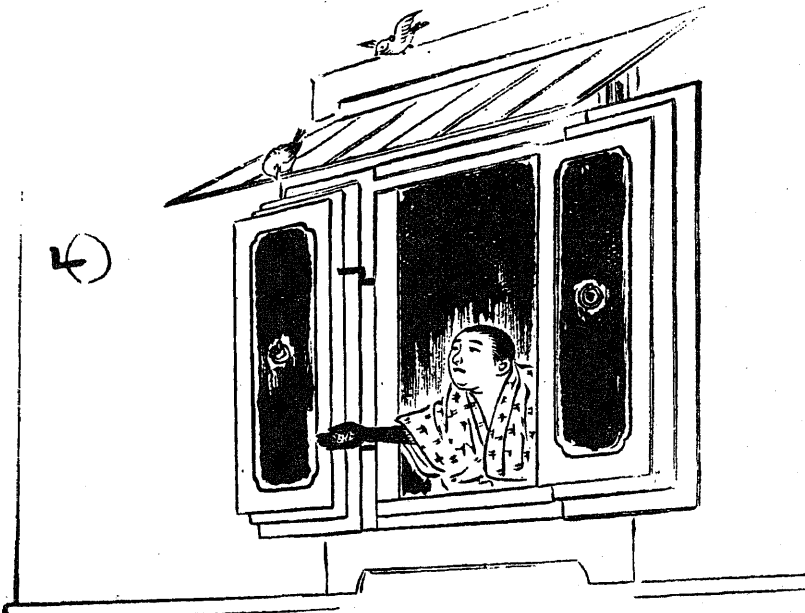
ると また こーして 同じ様に だして 置い
て たべさせる。

こんな風に 二三日 やつて 食べさせて お
さまして さて つぎには 自分の手を 墨で
真黒に ぬつて そのまつくろな 手の掌へ 米
をとせて倉の窓から さしだして 置く。します
ると 雀はまた 例の と馳走 だと思つて い
きなり 飛んできて 手の掌へ のつかうて 食
べ様とする所を「どつこいそーは」と云ふ具合に
握つて つかまへるのです。

と、まー こー謂ふんですがね、翁も なるほ
ど一寸 考へると 理屈は 甘いな と 思つた
もんですから「で、その 方法で あなたは 雀
をとりましたか」と 聞いた所が「いや まだ
取りはしない とりはしないが とれそーに思ふ

から 翁おきなに 一つ 其方そのかた
法たで 取とつて 見みて いた
いかう と 思おもつて お
咄はなししたんです。」

そこで 翁おきなも こいつ
は 一つ やつて 見みよ
うかとも 思おもつたですが
なにしろ 墨すみでもつて
手てを 真黒まっくろに ぬるなん
か あんまり きもちの
よいもんでもなし、それ
に きつと とれるか
とれんか それも 判然はつぜん
しないんですから まー
く 止とまはーが よ



からう と 思おもつて そ
う云いひました所ところが 其人そのひと
は「そんなら もー一
つ「方法しかたがある それは
よく 手輕てがるいから それ
なら いしでしよー」と
いうので 教おしへて くれ
たのが 次つぎの咄はなしです。こ
れは 一寸ちよっこ 面白おもしろいよー
です。

まづ 夏なつの熱あつい時とき お
ほきな 柏かしはの葉はを さよ
うさ 八九はちまいも 取とつ
てきて それから 酒さけの
糟かすを米粒こめつぶほぎに ちいさ

く丸めて それを 米粒と 一つの所に まぜ合
せて そして 柏の葉の 真中へ のせて これ
を 日なた へ 出しておくのです。

すると 例の通り 雀が た

くさん やつてきて 夢中にな

つて 葉の上へ 来て たべに

かゝる。所が ところが 計略で

す。そーら 米粒の中にわ 酒

の糟が ませて いましよー!!!

そこです。米だと思つて 食べ

た中には、豊計らんや 酒糟

が まざつて居たから 堪らな

い。いー加減に 食べて もー そろーく 飛ん

で 歸らうと 思ふ時分には からもー 酔つ

ぱらつて仕舞つて 動けない そーこう してる



中に そろーく 眠たくなつて 前後も 知らな
いで 寝こんでしまうので。

こーなると もー しめたもんで 其中に 柏
の葉が だんぐ 日に 枯れて 見てる うち
に 寝こんでる 雀を 巻いて仕まう。そこで
雀殿が やつと 酔が醒めても もー 飛んでく
ことも出来ない。だから わけもなく 雀が 何
羽でも捕るのである。

謎々の解

(一)いの字とかけて

船人の手と解く。心は 臙(ろ)の上に在り。

(二)ろの字とかけて

唇と解く。心は 齒(は)の前に在り。

(三)はの字とかけて